日刊 動労千葉
79.5.17
No.121
国鉄千葉動力車労働組合
千葉市要町二-八（動力車会館）
（鉄電）二二五八～九・（公衆）〇四七二（22）七二〇七

労農連帯を一層強め、三里塚・ジェット闘争を貫徹しよう！

いま、こそ動労大改革のとき！

動労才104回臨時中央委員会

路線的破産の末期的実態を現出！

動労の第一〇四回臨時中央委員会は五月一五日、動労「本部」において開催された。「七九春闘の中間総括と今後の取り組みについて」討議すべきこの中央委員会は、七九春闘や統一地方選を放棄し、唯ただ動労千葉破壊にのみ埋没したこの間の運動の誤りを反影し、お座なりの全くおソマツな方針書をそのまま確認し、もっぱら破産した動労千葉破壊策動についての発言のみが行われるという全く低調なものであった。　確認された「今後の具体的取り組み」なるものは、動労千葉に対する組織破壊策動と、中江前本部副委員長、西森副委員長以下二八名の各級役員・活動家に対する査問委員会設置だけなのである。　誤まれる運動路線にしがみつく労働運動の末期的症状を示すこの暴挙を、われわれは断固粉砕する決意である。

全くオソマツ！＝七九春闘総括

一〇四臨中方針書にある七九春闘総括は、動労自身が、四月二八日からの動労千葉破壊暴力「オルグ」を設定したことでもわかるように、全く闘う気がなかったにもかかわらず、総評や国労、全電通をはじめとする動労以外の闘いを全てコキオロし、「自分だけが正しい」とする恒例の「動労型総括」であったが故に、そして「本部」暴力集団が出した方針を批判する者は全て「千葉擁護」であるとして糾弾、追及される体質であるが故に、創造的討論など望むべくもなく、全くといってよいほど発言のない状況であった。

破壊策動の破産を当り散らす「本部」暴力集団！

ただ一点、動労千葉破壊に関する取り組みについては、自らの暴力やセクト的動労引きまわしを反省する能力を全く持たない暴力集団であるがゆえに破産したのだという現実を「千葉憎し」の一念だけで覆いかくそうとする暴力分子の発言のみが行われた。

しかし、この暴力分子の発言も動労千葉破壊策動が破産したという現実に消耗し切ったものであり、良心的、戦闘的組合員との深く大きい意識分裂、組織的亀裂に対する焦燥感のみが先行し、動労千葉の提起する「動労大改革運動」におびえ切ったものであった。

組合費を湯水のごとく費し、三万人もの動員者を投入しながらひとりの動労千葉組合員も獲得できなかったという現実をまともに総括することもできず、「本部」暴力集団の路線的破産を象徴する最大のポイントは「当面する具体的方針」として、暴力「オルグ」をはじめとする動労千葉破壊策動以外に提起できなかったということに決定的に露呈されている。

一〇四臨中における暴力集団の破産の末期的状況は、動労千葉の勝利が確実に進行していることを何よりも雄弁に示している。いよいよ、動労千葉の主張する「動労大改革運動」の正義性を全国に拡大してゆくときである。

「本部」暴力集団の画策する5・2以降の陰湿な「オルグ」をはじめとする破壊策動を完全に粉砕し、一四〇〇名の団結をますます強固に打ち固め、当面する「5・20三里塚現地集会」をはじめとする三里塚・ジェット闘争の高揚をかちとり、さらに「水本運動」の動労への持ち込みに反対し、「貨物安定宣言」を廃棄し戦闘的反合闘争を構築し、暴力とセクト的動労私物化を許さない戦闘的動労運動の再生に向けて、全国の仲間とともに奮闘しよう。

今後の取り組みは動労千葉破壊策動のみ！

「中江前副委員長が悪い」「権力・当局が千葉を擁護している」「動労千葉は中核派や革労協等と共に権力と一体となって動労の組織破壊に血道をあげている」などと荒唐無稽な論理を展開し、組織部長・城石の「もっと怒り心頭に発しなければダメだ」という発言に象徴されるような良心的組合員に対するどう喝は、多くの中央委員から冷笑をもって迎えられるだけだったのである。

この暴挙を許すな！『オルグ』破産の隠ぺい＝査問対象二八名に拡大

≪査問対象者≫

○中央本部前副委員長・中江昌夫○動労千葉副委員長・西森巌、同執行委員・水野正美、布施宇一、高橋邦彦、山口敏雄、吉岡正明、林熊吉、関豊、同副青年部長・宮内正志○動労千葉青年部　書記長・田中康宏○〈動労千葉・新小岩〉八木泰典〈津田沼〉山下幸、深見四郎、吉岡一〈幕張〉滝口誠、浅野修一、川崎秀二〈千転〉永田雅章、桜沢明美、内山等〈館山〉赤羽根昭夫〈勝浦〉窪田亮〈成田〉大須賀昭男、錦織芳雄、戸村英男、大畑勤

以上

全組合員・家族の強固な団結で組織破壊攻撃を粉砕せよ！